

第2回佐久市立中央図書館建替再整備検討委員会 会議録要旨

1 会議概要

日 時	令和5年2月27日(月) 13:30~15:30
場 所	中央図書館 視聴覚室
出席者	佐久市立中央図書館建替再整備検討委員7名(内リモート1名) 植松貞夫、豊田高広、森いづみ、森田秀之、柳澤拓道、小木田順子、篠原由美子 事務局10名 吉岡教育長、土屋社会教育部長、高橋事務長、依田館長、市川係長、高瀬専門員、 布施主査、金井主査、竹内主任、中村主事
資 料	・会議次第 ・理念・コンセプト等の素案 ・建替再整備アンケート結果(年代別)、中央図書館年齢別貸出人数 ・『建築画報141』佐久市立図書館
	(進行 事務長)
	市長あいさつ(図書館についての思いを語る。)
	1 開会 2 会長あいさつ 3 会議事項
	(1) 理念・コンセプトについて【資料1 p.1~】
委 員	みつける・そだてる・ひろがるという時に、みつけるというのは利用者が見つかる。育てるというのは利用者側なのか図書館なのか。何が見つかるのか、広げるとは違うということになると、これは「みつける」「そだてる」の結果なのかというところがよく分からない。もう一度方針を確認しながら話し合ったらどうか。
会 長	今の段階でこういうコンセプトではいかがかという提案の一つ。今あえてここでこれに決めましょうというものでもないので、別の言葉に変えることでもいいと思う。
副会長	いろいろな意見が出ている中で、違うことを言っているわけではない。それならば共通の方向性は何かと考えた時に、情報とか知識についての捉え方をもう少し深めていく必要があるのではないかと思う。深く物を考える時間が必要。共通の課題として方向性を定めていってはどうか。

委員	<p>情報知識の捉え方を確認することは本当に意義がある。図書館の用語で言うと、図書館資料に対して「情報」という言い方をしてきた。図書館資料というと、図書、雑誌、紙芝居、絵本など。図書館でいう情報とは、形のないデジタルのものという捉え方をしてきたところがあり、情報の中に書籍を含めていると思うがそこが頼りない感じがする。情報をどう捉えるかやはり確認しておかないと話が進まない。</p>
委員	<p>情報は現在溢れすぎている。ネットでもたくさんの情報があつて、何が自分にとって意味があるか、自分の物差し、価値観がきちんとないと何を選んでいいかわからなくなってしまう。「図書館に情報がいっぱいありますよ」というのはあまり意味がない。自分自身の価値観を分かって必要なものを判断していくことが大事。</p> <p>自分の感覚や体感、経験が重要なものだと思う。知識とか情報とかはその後の話。図書館というのは今までは情報や知識を扱っていたのでガラッと変わる。「図書館」という名前は置きながらも、もっと大きな自分の生きていくための術を考えるような場所にしていく方がいいのではないか。</p>
委員	<p>情報や知識は目的を達成するための手段だと思う。図書館のイメージとしては、書籍や情報があるところであるので、図書館はそれを活用する場であることは確か。（知識や情報を）何のために活用するのか。「何のために」を表す文言・理念が必要。</p>
会長	<p>様々な情報が流れている中、情報を入手した時に取捨選択し評価しながら自分のものにしていく。そこで間違った方向にどんどん進むと、どんどん変わってしまう。図書館がそういう情報の評価方法について指導するとか安心できる情報を提供するなどの役目がある。</p>
会長	<p>どういう方が新しい図書館の主な利用者になるというふうに考えているか。</p>
事務局	<p>対象は、赤ちゃんから100歳近い方まで。特色ある図書館プラス中央としての機能を持つということを考えている。各館は各館に根ざした図書、中央は中央図書館でしか手に入らない資料を揃える。情報検索も含めて、教育機関としての機能をきちんと持たせながらやっていきたい。</p>
会長	<p>佐久平駅の近くに分館的なものをつくる計画はあるか。</p>
事務局	<p>要望や質問は受けているが今のところ作らないという形で回答している。</p>
会長	<p>小海線で来ると新しい家が建っているが、その方たちは新しく建てる図書館の利用者ということを想定しているか。</p>

事務局	<p>佐久平駅周辺は浅科と中央の中間位になるが、佐久平駅周辺では他に図書館はないので基本的には新しい図書館をご利用いただくようになると考えている。</p>
事務局	<p>合わせて移動図書館車がある。佐久平駅にも巡回場所があって、近年その利用者はとても増えている。高齢者施設もあるため高齢者の方もよく利用してくれる。夏休みなどは小学生も移動図書館車をよく利用している。</p>
会長	<p>札幌の郊外の方は高校生になるとお母さんの車には乗らないということがあったりするようだが、このあたりはいかがですか。週末に家族揃って図書館やイオンに行くようなことはあるのか。</p>
事務局	<p>(イオンへは) 休みは家族揃ってという家庭もある。特に小さい子供がいる家族。高校生は入口で下ろしたり、自転車で行ったり。</p>
委員	<p>図書館が不登校のお子さんの居場所となっているところもある。地域の中で居場所がないような人がいるべき場所が今はとても必要になっている。臼田や望月などととても遠い。学校に通えないお子さんの居場所づくりを実現しようとする財源がいくらあっても足りないくらいスペースを作らないといけない。</p> <p>図書館のOSというものをしっかりとここで作って、空き家、空き店舗、住み開きの自宅等に、図書館機能をすぐにインストールできるような考えでないと、広大な佐久市の全域をカバーできないと思う。中央に豪華な図書館を作りましょうということではない。多分これから日本全体の社会が変わっていく際にはこういう考え方が必要になると思う。</p>
副会長	<p>先程の市長の話で「佐久平駅の街の新しい中心市街地に子どもが集まってくるのは長野県ではここだけであり、子育て支援を重視していかなければいけない」という話だったと思うが、その子どもが何で集まってくるかという遠くへ通勤できるようになったから。市外や県外から住民が来るようになったということ。</p> <p>今の居場所の話で言えば、居場所がなかなか見つからない。いつまでたってもその地域のコミュニティに溶け込めない。自分たちは年をとったらどうなるのだろう、など地域側から見てもいろいろな問題がある。</p> <p>図書館はみんなのためのものと言わなければいけないけれども、それと同時に、住んでいるが居場所が見つからない人たちと、市外から来たけれども居場所が見つからない人たちのニーズを満たしていかなければならない。</p>
委員	<p>全ての図書館を含んだ図書館機能のネットワークをどう作っていくか。本との出会い、人との出会い、身近な居場所、サービスステーション的な話、移動図書館車。中央図書館という物理的にも1ヵ所しかないこれをどうするかという話は、結</p>

局は大きな目で見てトータルで考える必要があると思いますが、ちょっと切り分けた方がいいのかなと思った。

今は中央図書館の建て替えという話がメインだと思うので、そちらに軸足を置いた議論が必要になってくる。郷土資料、いわゆる郷土資料と呼ばれるようなものを中央図書館に来れば他ではできない中央図書館ならではのしっかりとした基盤がある、情報基盤があるんだというような考え方でいくのかどうか。

デジタル化の話と組み合わせて、物理的には離れていても十分な資料の活用ができるような環境を整えていくのと同時に貴重な資料は保存の設備もしっかりとしていて、せっかく建替えるのであれば、そういう場をきちんと作りますということも合わせて考えていけたらと思う。中央図書館の物理的なこの場所でやることと、周辺のネットワーク機能を使った窓口業務的にやる話の組み合わせで考えていけるのかなと思う。

会 長 (2) 6本の目指す姿について【資料1 p. 4~】

今までお話いただいたのは図書館機能のネットワークを多心型構造の佐久市においてどう捉えていくべきなのかということと、中央図書館がその中で担うべき役割はどういうものが考えられるか、どの点を重点的にやっていくかという話だと思う。

委 員 図書館が一番大事にしなければいけないのは資料提供だと思う。利用者のニーズにきちんと応え得る図書館であることが大事。

そのニーズというのは目に見えるニーズだけではなく、ニーズそのものを掘り起こすような、そういうものも含めているということ。図書館というのは集めるというよりはその入り口であって、拠点にして広まっていくところだと思う。

委 員 ニーズをどれだけ察知するかということをととても重要に思っている。気づいていないようなものをどう先回りして用意するかになる。ニーズを察知する仕掛け、仕組み、活動というのを図書館が仕掛けていかないといけない。

例えば、地域で必要なテーマを2か月に1度くらい設定をして、取次店に100冊ずつ本を持ってきてもらう。リクエストだと利用者は読みたい本を要望するが、この場合は利用者自身が気づいていない本も並ぶ。あるいは、トークイベントをやって、その中でどんなことに興味があるかというのをヒアリングしたり、アンケートをとる。あるいはドキュメンタリー映画を上映し、映画の後にアフタートークをする。その映画に対してどのくらい集まるかで内容の関心度がわかるし、その後のアフタートークがどれだけ盛り上がるかによってそのテーマが地域のひとにとってどれくらい関心があるかがわかる。

ニーズを察知することを図書館員さんはあまりできてないと思う。それは本を貸した後の反応が全くもらえないから。図書館には感想を聞く場面がない。図書館は

<p>委員</p>	<p>喋ってはいけない場所だと双方が思っている。対話をしていいということ等、あらゆることを変えていかないとニーズは察知できない。</p> <p>建て替えると、この図書館が本質的にどうあるべきなのかということとは、切り分けられないのでは。</p> <p>本を巡る環境で東京などと比べて一番大きな違いはこのエリアはやっぱり書店の数が圧倒的に少ない。ニーズを察知する以前に、世に出ている書籍とか雑誌とか新聞などに触れる機会がとても少ないのではという気持ちを持っている。図書館が佐久においては、ある意味、書店が本来果たしている機能も担わないといけないんじゃないか、というか担ってほしいなというのが、ここの図書館のあるべき姿として私が一番に思ったこと。</p>
<p>委員</p>	<p>今の話、共感します。長野県下でも一番大きいレベルの蔦屋書店ができたが、置いてある本はいわゆる教養書が中心で岩波文庫や岩波新書はとても少ない。佐久平の子たちが本を読みたい気持ちが芽生えた時に、そのコーナーにそれしか本がないとなるとまずいなと思った。東京の大きい本屋と遜色ない感じでセクションされた本を見ることができるといいのではないかな。</p>
<p>委員</p>	<p>「たくさんの情報に出会える」の「たくさん」のところが、量的にたくさんあるという話と、多様であるという話と、それがさらにその地域の人ならではの気がついていないニーズに繋げるというのと、いろいろな意味がものすごく込められていると思う。先程の佐久平の子ども達の物理的な空間が大きくなり、量や質も限られている状況の中で、子ども達とその先にあるものを想像できるかどうか。</p> <p>ある子育て世代の方のお話で、今図書館がある場所がとてもいい。アクセスもよくて、あそこに行くと浅間山がどんと見えて、いろいろな施設がたくさんあって、日常的に毎日行けるわけではないけれど、行くともとてもいい。あの場所が充実するとやっぱり嬉しいなということ話を話していた。</p> <p>この土地の強みというのを生かしながら窓口になるようなアクセスポイントのようなものを町中にたくさん作って、でも中央図書館の強みというのは規模も大きく、資料もたくさんあって、人のサービスもあるという、そんなところだということがわかるといいのかなと思った。</p> <p>物理的な制約を超えるようなところは、それこそネットワークを使った情報の見せ方というところで世界を広げていき、ちゃんと繋がっているということを表現する必要がある。だから理念とコンセプトというものをしっかりさせ、どう表現し伝えるものにしていくかだと思う。</p>
<p>会長</p>	<p>実際問題としては全国的に見ても、図書館の資料購入費も非常にここ数年すごい勢いで減っているというのが実情で、大変難しい問題。</p>

	<p>書店と図書館というのは、読書人を育てるという意味では同じ目標に向いているが、共存共栄を図るということも大事ということでしょうか。</p>
副会長	<p>たくさん本があるからたくさんのお会いがあるわけではないということは間違いなく言えると思う。今図書館でテーマ展示を前面に出している図書館が増えていて、そういう図書館は実際問題として通常だと10万冊置くべきところに2万とか3万でやっているが、実際にはすごく本との出会いは増えるというか、多くの利用者の好奇心が満たされると知的な刺激を受ける、そういう場になっている。どういう形でいろいろな人たちに選択肢を、人生の選択肢みたいなものを提供していくところで情報に出会えることが必要なので、そういう観点でたくさんのお会いに出会える場というのは整理していった方がいいと思う。どういうふうに見せていくのか、どういうふうに出会うのか、その出会いをどこへ繋いでいくのか、というようなことを考えた図書館の作りというものにしていかないといけないと思う。</p>
委員	<p>図書館の規模も、20万冊を超えて開架していると結構迷子になる。15万冊から20万冊の間が一番いろいろなことを見つけることができているという感覚を持っている。量の多さよりも、やはり見せ方、テーマなど見出しの付け方等、丁寧にやることが大事だと思う。</p>
委員	<p>今のお話を聞いて、なぜ図書館ではなく三省堂に行っていたか、わかりました。冊数的には都立図書館より少ないけれども、三省堂に行く面白い提示の仕方をしていて、自分で何か気づいたように本を取っていたのだと思う。</p>
会長	<p>棚作りというのはお店と同じように図書館員の一つの専門的な技能の発揮の場だと思う。ハーバードの学部学生用の図書館にラumont図書館というのがあって、10万冊以下にしている。ラumontの説では、学部学生は10万冊ぐらいの本でないと自分が勉強するのに情報量が多すぎると言っている。</p> <p>今、書庫の中に眠っている本も実はこういう見方をすればこんな参考になる本ですよということで、書庫の中から職員さんが今度はこういうテーマで本をピックアップしてきてレイアウトしてみようとか、今ある本を別の視点から見直す、そういうアピールをするというのもテクニックとして重要だと思う。</p>
会長	<p>郷土の文化、芸能と図書館とはどうあるべきかのところで発言ある方いますか。日本語が母語でない人というのは佐久には相当いらしてるのか。</p>
事務局	<p>そんなに多くはないが、ここで生活している大事な住民なので、教育委員会に登録されている外国籍の国の子ども達の本は、冊数は多くないが、なるべく置きたいと心掛けてはいる。</p>

事務局	<p>これから介護人材の関係で研修生が入ってくるので、ベトナムなどの方達も増えてくるのではないかと思います。</p>
委員	<p>先ほどの市長の話の中で、先人研究という話をされていたが、今、「繋がる」と言っているが違った分野で繋がるような水平方向の話ばかり。垂直のつながり、例えばおじいちゃんやおばあちゃんの話聞くような年代の違う人たちに話を聞くということが足りなさすぎるということをいつも懸念している。特に子どもの時に、地域のお年寄りの話を聞く経験は、地域、社会に携わる時にとっても重要になってくるという研究もある。（『子どもの参画』という有名な本がある）</p> <p>また、図書館が自費出版や簡易出版していくような出版機能、編集機能を持つ可否かということは結構大きいと思うが、図書館として編集室（編集機能）を持つことはどうでしょうか。</p>
会長	<p>編集室ってそんなすごいものではないから、機運が醸成してきてやろうじゃないかなればやれば良いと思うが、最初から計画しないとできないものか。</p>
委員	<p>デジタルで集めて公開するという事はできるし、それを簡易的な出版物にするという事はできると思う。出版もするスタンスというのはとても大事だと思う。</p>
会長	<p>歴史的なものを集めている市内の施設というのはあるのか。</p>
事務局	<p>あります。文化財事務所というのがありまして、古文書等を保管したり、土器や石人、旧石器時代の物等を保管したりしている。そこら辺は図書館と一緒にやっていってもいいのではないかという思いはある。</p>
事務局	<p>佐久の先人に関しても図書館ですっとお話をしてもらっており、本には載っていない部分もお話してくださっている。今、佐久ケーブルテレビで収録をしていて放映をしているが、それがアーカイブになっていくといいかなと思っている。それを元にしながら参考文献だけ集めてもコーナーができるのでは。いろいろな要素を持った佐久の先人の事業だと思っている。出版機能のようなこともできたら本当に素敵だと思うが、いずれにしても実現可能かどうかはこれからの地域の皆さんの気持ちの持っていく方かなと思う。</p>
委員	<p>人や歴史的なものを調べる時にその調べたものや資料を置いておくような、またそれを編集していくような室があるとよい。こういったプロジェクトを進めるにあたり、小部屋を1室用意して、作業している間、調べ上がるまでは片付ける必要が</p>

事務局	<p>ないという場所があればいろいろなものかなり進む。逆にそういう部屋がないと進まない。</p> <p>まさしくそれが私達の考えている「そだてる」「ひろがる」の広がっていく状態。それを願うには今言ったような場所が必要ですし、こういうことだからこの場所が欲しい、入れますというように計画が流れていくと考えている。</p>
委員	<p>そう。やっている様を見せる。</p>
委員	<p>長野県の特徴で、公民館の活動が盛んというのがある。公民館の新たな活動として地域で取り組んでいくということはあると思うし、その時に資料がある図書館を使ってその取組を展開していくこともできる。</p> <p>資料のデジタルアーカイブ化の時に、予算はないし人がいないから無理だよというふうになるけれども、全部図書館の中でやろうとするからできない。それを市民の方と一緒にやりましょうというふうに開いていける。そうすると予算とか人手がそんなになくても、教える人がいてその教えられた人がまた周りの人に教えてというふうに、知が循環していく仕組みがそこに出来上がっていくと思う。そういう場所を作っておいていただくともものすごく広がっていくだろうと思うので、是非あったらいいなと思う。</p>
副会長	<p>紙の本を出版できればいいが、紙の本はいろいろハードルがある。インターネットの普及後は大きく環境が変わったので、インターネットであればすぐに出版できる。電子出版は簡単にできますし、ユーチューバーになりたいという子ども達も広い意味で一種の出版活動をしている。メディア全般について編集して発信していくことをサポートするというのは、世代の別に関わらずニーズがあるのは間違いないので、それを積極的にバックアップしていくということを考えていく必要がある。そういったものを流通させていく仕組みを県レベルで佐久は応援しますよ、みたいなことも考えられるのではないかなと思う。</p>
委員	<p>利用者を巻き込むような形のもの、とてもいいと思う。</p> <p>一方で、市内の博物館機能を持ったところの話で、例えば浅科の五郎兵衛記念館では蔵一つが文書で埋まっている。それぞれの施設がそれぞれ資料を持っているわけだが、そういう資料を図書館に全部集めるのではなくて、情報がここにあるよ、調べればそこに行ったら資料があるよという、そういう仕組みを図書館の中で作るということが大事なんじゃないかなと思う。その仕組みは人との関係についてもとても大事なことだと思う。</p>

副会長	<p>市民が自分の家や地域、その周辺で、ミュージアムやライブラリ、アーカイブを作るのをバックアップする。それによって街中がミュージアムなりライブラリなりアーカイブになるというような方向性が、多分これからの情報に関わる地域情報のあり方・方向性なのかと思う。</p>
委員	<p>エコミュージアムという考え方があって、博物「館」ではなく暮らしの中で使っているもの、様子を見せていく、地域全体を博物館に見立てるというやり方がある。その時にはコア施設というのは必要で、それに図書館がなるというのはできる。(フランスで始まったエコミュゼ)</p>
委員	<p>今、写真を公開しながら市民も投稿してフォトアルバムを作っていくという動きも出ている。小平市(東京)の図書館では定点観測をしてアーカイブの形で公開しているが、アーカイブも市民の力を借りながらできると、今の情報を見るのと同時に、将来の利用者にとっても歴史的な価値が持てるのではと思う。</p>
委員	<p>アーカイブは見せる機会も含めて提供しないと駄目。ワインみたいなもので飲む環境、それも提供しないと気づいてくれない。</p>
事務局	<p>佐久市は行政で持っていた写真をまとめてアーカイブ化してアップすることになっている。それぞれの館で持っているデータを県立図書館にサーバーを置きながら、各地域とつないで情報提供するというのも(県で)検討中。佐久市の文化施設も、各施設を繋ぎたいということで今館長たちはいろいろ構想を練ったりしているが、そういう段階に佐久市もある。でも具体的にどうするかということは関係機関と調整しながらということになるかと思う。</p>
会長	<p>(3)次世代を担う人づくりのできる場・・・ターゲット連結の話。 (4)活力ある人づくりを支援する場、(5)人と人が出会える場・・・郷土の文化と関わっている。</p> <p>今までの話、全部を図書館がやろうとしたら非常に大変な図書館員にならないとできないが、それが無理だとすると市内の他の組織や個人、市外の方も含めて、どう協働し連携していくかということだと思う。例えばデンマークではサポーター制度と言って、図書館と協定を結んで毎週水曜日に私達はこういうイベントをやり、こういうことに関しては、私達が責任持ちますということをやっている。また、デンマークのオフィスの図書館では何でも修理してあげますという修理屋さんグループがいる。図書館の中で図書館員だけでなく出版のプロの方、あるいは市内の子育て支援の方や税務の方に来てもらうとかして、様々な専門的なサービスを提供するということが考えられると思う。</p>

委員	<p>今、いたるところで、すごく頑張っていて、自分はこんなことを考えてこのショップを始めました。と言っているいろいろな手段を使って発信している方がいる。市として起業やビジネスを応援するというのはあると思うが、図書館も移住してくる方たちのネットワークの拠点みたいになって、そこでその人たちが新しい所で始めた仕事とか、そのことを教え合う場とか、共有し合える場、スペースみたいな拠点ができると、それは次の時代に繋がる人づくりになるのではないかと思う。</p>
委員	<p>長岡市の米百俵プレイス（建設中）では会員制のサロンを作ること考えている。会員制というのはお金を払うということではなく、想いが熱い人たちが集まって、情報交換をしたり、イノベーターをお呼びして話を聞くとか、集中して議論ができるようなサロン、ラウンジのような場所。そういった場所も必要だと思う。従来の図書館でみんな話そうとするとなかなか難しいが、そういう想いを持った人達が来るといろいろ決まっていく。</p>
委員	<p>今の話、面白いですね。本は割りとを集めやすいコンテンツかなと思う。例えば、農にまつわる本を企画展としてやって、そこで農を実際にやっている人とこれからチャレンジしたい人が集まって会話をする。その帰りがけに並んでいる本を借りるとか、いろいろな形で少しずつコミュニティができるといいのかなと思う。佐久だと農業、食、あるいは自然かもしれないが、コンテンツを特化して本を集めつつ、そこにコミュニティも集めるみたいな方向は面白いのではないか。</p>
委員	<p>まさにそういうコミュニティを私は「アソシエーション」と呼んでいるが、例えば森林組合など。山仕事で資料を集めて、林業士に呼びかけているところがある。そうすると地域のコミュニティとアソシエーションが縦と横の糸になってとても強固なつながりとなる。林業をやっている人は各地域に散らばっている。その人達が一堂に集まって、また各コミュニティに入る。</p>
会長	<p>例えば文京区みたいに半径1キロぐらいで図書館を置いているところだと、ここは音楽の資料を、ここは文学でいきましょうとかということ是可以できるけれど、これだけのエリアをカバーしなくちゃいけないとなるとあまり一つの図書館で特色あるコレクションというのはきつい部分がある。もちろん一部でそういうことをやることは可能だが。</p> <p>本のある公民館みたいな方向というのが一つで、これは今、図書館界全体としてそういう方向に向かっていくということも言える。</p>
委員	<p>コミュニティが自由に集まって自分たちのやりたいことをお互いに持ち寄って、ある程度期間をかけて人間関係を深めながら何かを作っていくというような場のあり方と、市のサービスの見本市的な場所に図書館はなれるのではと思っている。図</p>

	<p>書館にいろいろな部署の人たちが時々やってきて、お店が開けるような場所が図書館にあると気がついてもらえる。せっかくいいサービスをやっているのに知られていなくて、広報しているつもりでも届いてないということは、図書館以外もどこでも起こることだと思う。相互乗り入れして、図書館のあるスペースはいつもいろいろなところがやってきて、何かいろいろことをやっている。図書館も逆にそこにお邪魔して、何か関連書籍とかデータベースの紹介をするみたいな、そういう相互作用ができるような場所というのがあるといいと思う。</p>
<p>会 長</p>	<p>本のある公民館、かつ、お互い同士が行ったり来たりし合えるようになるということでしょうか。</p> <p>(6) ゆったりくつろげる場というのは、市長の話の「ヒュッゲ」だと思う。</p> <p>(3) 次世代を担う人づくりのできる場、子ども達への読書推進で何かありますか。</p>
<p>副会長</p>	<p>学校と学校図書館との連携というラインと、学校と違う何をするのかというラインと両方考えていかないといけないと思う。今、子ども司書が岐阜などで盛んだが、子どもが本を勧め合うみたいな、そういった仕組みを作っていきましょうという話も出てきている。自分自身で選べるということ、選択肢がいっぱいあるということ、刺激を受けるということがとても大事だと思う。それは学校型の学びとは違う学びのあり方ではないかと思うので、その二つのラインを考えていということが必要かなと思う。</p>
<p>委 員</p>	<p>本当にそのように思う。学校はそれぞれ違う学校の生徒が会う場所というのではないので、そういう意味では佐久市の全体的なビジョンを考えた時に、10代の人たちが集まって、発信していけるような、自分たちがやりたいことをやっていくような場が図書館にできるといいと思う。</p> <p>(3) その他 今後のスケジュールについて</p> <p>4 閉会</p>